

モンゴロイドたちは西へ東へ南へ北へと旅をした。日本列島から先は、ユーラシア大陸沿いか、もしくは黒潮ルートでアメリカへ渡ったことだろう。

つまり、ポリネシアンとか日本人とか、北米人、南米人といったことではなく、たんに「太平洋湾」沿岸の、「縄文・弥生」時代モンゴロイドたちの交流が、あったのである。バラク・フセイン・オバマ米大統領ふうに見える「一つのモンゴロイド」あるいは「一つの太平洋民」という発想・観点・仮説が大事なのではないか。

遺伝子などのさまざまな生化学的分析によって、それぞれの地域の人々がどれほど生化学的共通性を持っているか否かは、次第に明らかになるだろう。

しかし、そのようなことは、人間関係や交流の生態を追及するうえで本質的な問題ではなく、どのような文化的遺伝子を共有しているか否か、といったことを、もっと問うべきではないか。

生物学的別種であっても、人々はともに生きていかにくはならないし、ともに生きている。それを可能ならしめるレベルの心的ウイルス、心的タンパクを探ることのほうに、現代人においてこそ急務ではないのか。

異界生活者同士の接触が本来の神事、お祭りとして、人々の生活を活性化させるものであったということ。仮

であった。それを暗示するかのような伝承が、応神紀三年十一月条にある。

處處の海人、訕駭きて命に従はず。則ち阿曇連の祖大濱宿禰を遣して、其の訕駭きを平ぐ。因りて海人の宰とす。

あちこちの海人たちが、わけのわからぬことをしゃべり合って、天皇の命を聞かない。そこで天皇は、阿曇連の鼻祖に当たる「大濱宿禰」を派遣して、騒ぎを平定させた。その功績によって、「大濱」を海人集団の管掌者とした。

岩波古典文学大系の補注に、「この記事はアマが、支配層と異なる言語を使っていた異民族であることを示す記事とも解釈される」と指摘している。

実に興味深い指摘である。

日本列島の原住民の間に、異人が混入している、というのではあるまい。温暖で水も食糧も豊富な、海民にとって実に快適な繫留島として、異人種たちが次々と取り付き、日本列島の輪郭が出来上がっていったのだろう。

「純粋な原住民」など、想定しないほうがよい。

この当否はともかく、海人集団というのは陸地中心の生活者たちにとって、いざという時には頼もしい異能者

に血縁は薄くとも霊的な縁戚関係の取り結びが、それだけの文化に新鮮な生命力をもたらしたはずで、そうした心意伝承の局面的追求が、もつと望まれるのである。

「私」たちは、「環太平洋生活共同体」であった記憶を呼び戻すべきである。日本が島国であるのは事実としても、「孤立していた」というのは、実は幻想に過ぎないのではないか。

しいて言えば、「日本列島」からの太平洋横断は、確かに老若男女を問わずホイホイできた、というわけでもないだろうから、太平洋へ飛び出すか、それとも列島にとどまって、来た道に戻るか、あるいは定住するというケースも、少なくともなかったであろう。「日本列島」は、いわば諸文化流通回路中の凝結器、とでもいうべき役割を果たしていたのである。

海人族は異人種のるつぼ

海部や磯部、宗像、阿曇、大海人といった海人集団は、こうした海洋モンゴロイドたちの、少なくとも文化的DNAを受け継いだ者たちであったに違いない。くわえて逆説的に言うと、根本の文化的遺伝子やアイデンティティーは共有しつつも、表面上はばらばらの人種たち

たちだが、通常はどうにも手に負えない制外者であったと見て、大過あるまい。

この「大濱」は、「釈日本紀」巻六所引の、「筑前国風土記」逸文、「資珣鳴（今の志賀島）」の地名由来譚にも登場する。神功皇后の新羅遠征隊の「陪従」とあるから、この水軍の水先案内人というか、船団管理者であったのだろう。

書紀、風土記と、出典は異なっているものの、神功、応神二代にわたって重用されたと伝承される「大濱」は、海人族の中でも中心的存在として、大和政権内では位置づけられたはずである。とすると、「大濱」が海人族全体を管掌するようになってのちに、「大海人」とも呼ばれるようになり、やがてその首長の子女から、大和天皇の皇子の乳母が選出されたこともあっただろう。そうした皇子たちが「大海人皇子」たちであり、そのうちのひとりが天武帝となった、と考えられる。

あながい、乳母制という、養育上不自然なきたりは、大王家の子女を有力豪族への人質にすることが、主目的だったかも……。

北極星の「水泳御魂」

前回触れたように、天武帝の頃に、日本国の首長を「天皇」と称するようになった。

いったい、なぜ「天皇」なのか。「天皇」に何を見ていたから、人々は天皇制を受け入れたのだろうか。

「天皇」という称号の意味については、古代中国思想史の福永光司の指摘を参照しよう（『馬』の文化と「船」の文化 古代日本と中国文化」一九九六年 人文書院 二二—二四頁）。それによると、紀元前後に頻出した緯書（儒教経典の解釈書）の一つ『春秋緯合誠図』に、「天皇大帝ハ北辰ノ星ナリ。……紫宮ノ中ニ居リテ四方ヲ制御ム（傍線筆者）」と記されており、同様の記述は後漢の張衡（七八—一三九）の哲学詩『思立賦』にも見えるという。「北辰」とは「北極星」である。

位階制の体系づけや中央集権制度の強化を進めるなど、天武天皇は、中国の唐との国交は断ちつつも、律令国家としてのハードを整備しようとするうえで、概ね漢皇帝による専制支配を手本にしている。

がよく言われるように、「皇帝」はあくまでも人間であり、最大軍勢力を備えた「権力者」である。それに対して、私見をまじえて言うと、日本の「天皇」は軍事

力を「私有」はせず、人間たちによって養われなければならない「權威」を備えた「神」である。おかしな言い方なのかもしれないが、日本列島に生きる人々は、武力も財力もない天皇を、どうしても養わずにはおれない心意・感性に支配され続けているのではないか。今に至るまで。

天皇とは、そういう「権威者」なのである。これを私は、「中心への排除」と考えている。天皇星（北極星）を中心とした、内実は有力豪族による連合政権体制の発明である。

狭い沖積低地を奪い合う弱肉強食的な国体構造を改革する、こうした世界観を発想しうるのは、武力で壬申の乱を制した「大海人皇子」ではなく、実際に北極星を天の至高神として信仰する、海人族にほかなるまい。

伊勢神宮に参拝した折、式年遷宮の時の、建材切りだしや、柱曳きの行事をビデオで見た。奉仕者たちの法被の背中にいちように「大一」と記されているのが目につき、やっぱりな、と思った。

「大一」とは「太一」とも記され、中国上代の思想で天地万物の根源であり、宇宙の本体を意味する。そこから、宇宙の絶対中心の唯一存在、北極星をさすようになる（小学館『日本国語大辞典』）。

つまりこの奉仕者たちは、伊勢の地の海人の系譜に位置づく人々で、太陽信仰はもとより、じつは北極星信仰を根強く持っていることをも、示しているのである。このことをより具体的に、祭礼の中で残しているところがある。

伊勢神宮の南東、志摩地方の磯部町伊雑宮。皇大神宮への御贄を献上するための土地として選定された、海陸の物産豊かな地である。地元民の間では、実はこちらのほうが伊勢神宮の本来地であるという意識が、今も根強く残っているらしい。

この伊雑宮で毎年六月二四日に行なわれる御神田祭は、日本の三大田植え祭りとして有名である。それらの中でも、伊雑宮の特異な点は、田植神事が始まる前に、地元漁師たちによる奉仕、というか、狼藉というか、荒っぽい行事が先に入ることだ。

この日は日本各地で、田植え前の水田で泥んこパレーなどのイベントが催されることを以前指摘したが、ここ伊雑宮ではスポーツイベントのような意味あいはなく、たんに漁師たちが泥をかけ合い、じゃれ合い、もみ合い、勝手に泥んこダイブしたり、と暴れまわる。これを私は、天津血（天の血・霊）にまみれる一種の神事ではないかと述べた（本誌二〇〇八年一〇月号）。

こうして何らかの靈格を得た彼らによって、御神田の北辺に立てられた「忌竹」を倒して笹葉などをちぎり奪い合う、「竹取神事」が行なわれる。この「忌竹」に、サシバと呼ばれる巨大な団扇が二枚取り付けられていることに注目しよう。

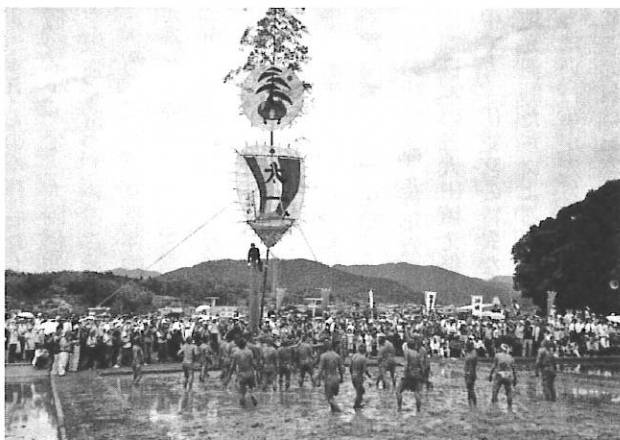
もちろん、この意匠の「起源」を策定することはできないし、目的ともしない。ただ、今に至るまで伝承されている心意の結晶には違いなく、磯部の民が奉斎する宝意識も、読み取ってよいのではなからうか。

下の大きなほうが、「太一」と帆に大書された船。地元磯部の漁師たちの信仰を表し、またこの場に輝く北極星そのものの「やつし（趣向を凝らした比喩的表現）」でもあろう。この忌竹を御神田の中に倒す行ないは、北極星の煌きが田に降りる、移る（映る）さまを見ていることになるのだろう。

これもまた、「水泳御魂」と同様の心意伝承かと思われる。光と水との融合。すべてが「見立て」で何の実体もないが、そこに神秘神威の発動を体感すべく、地域性に根差した趣向が仕掛けられている。

見惚れるほどの肉体美を持つ荒くれ漁師たちが、餓鬼のように泥まみれ（天津血まみれ）となり、北極星の「やつし」である、女性的な忌竹を泥田に引き倒し、天

津血みどろにし、ちぎり、蹂躪し、皆で引き回す。痛ましいような、官能的でもあるような光景である。漁師たちの荒々しいふるまいは、この場が宇宙空間へと遊働転換するにあたって、遊働世界に翻弄された生命の、歓喜と狂気の未分化な躍動と見える。彼らなりの最大限の、神霊への歓迎法であり、賛仰なのであろう。



伊雑宮 御神田のサシバ

“天皇島” 幻想

では上のほうのサシバに描かれた島台は何であろう。島台は通常、屋内で用いるものだが、原理的に考えれば、その島台の置かれた場所はすべて水域と見立てる、という演出をするものである。

すでに田んぼには水が張ってあるし、この人たちはこの演出で何を見ようとしてきたのだろうか。と、地元の人に聞いても皆わからない。前からああしてただけだと。

表の意識ではわからなくなってしまうても、細胞の奥深くに脈づいている記憶があるから、ああしたデザインを、意味はわからずとも伝承し続けているはずだ。

ここで、先ほどの「環太平洋交流」の仮説の上にさらに、「思い付き」の凧を揚げてみるのをお許しいただきたい。

ポリネシアからインドシナ、ユーラシア東岸と日本列島、北米、南米と連なる太平洋を大循環する海のモンゴロイドたちにとって、コミュニケーションセンターはどこであったろうか。

この海域の、座標上を中心であり、かつ神域としての聖標もあるところ。といえばやはり、標高四二〇五メー

トルの雄大な標の山、白山を擁するハワイ島ではないか。そこが地域や部族の違いを超えた中心的聖地たりえたのではなかったか。彼らが共通で信仰する北極星の、この世への移し（映し）の島として。

ポリネシアンの活動圏の大部分は南半球にある。にもかかわらず、わざわざ北半のハワイまで生活圏を伸ばしておこうとするのにも、彼らのやむにやまれぬこだわりを見いだせよう。

つまり、海のモンゴロイドたちにとって、ハワイが“天皇”だったのである。天皇星というか、“天皇島”である。

太平洋圏全体の幸福と秩序を保つために、誰かが人間たちの天皇（北極星）として、こうした中心に排除されねばならなかった。北極星と婚姻するか、仕えるかして太いパイプを作り、永遠に海民たちの上に北極星が輝き続けるように。

そうした天皇は、おそらくポリネシアンから出されたのだろう。そうすると元横綱曙の祖先は、ひよつとしてカメハメハ大王とも縁があったかもしれないが、もつとさかのぼって太平洋民の天皇だったかもしれない。曙（太陽の誕生）という名を負っていたことすら、暗示めいて感ぜられてしまう。

北極星に捧げられた“太平洋天皇”は、最高峰の白山山頂に立ち、満点の星のもと海民たちのために祈る。虚空に雲のかからぬよう、北辰が常に人々の在り処を照らすよう。そう念じながら、おごそかに降霊舞踊を舞う。そんな情景が思い浮かぶ。

ところがウイキペディアには、ハワイへの人間の移住は四〜八世紀ごろ（？）とある。そういうことなら今の話はまったくの冗談になってしまうが、少なくとも、北極星中心の秩序世界を、人々は人間界にも移したかったのではなからうか。日本列島で天皇制ができあがる以前に、そうした構造を持つモデルケースが、海人たちの間でも考えられていたのではないかと思うのである。

ともあれ伊雑宮の御神田「竹取神事」は、北極星（太一）の船と、漁民たちがはるかな太古にあがめていた“天皇島”（島台）とを、この場に招き寄せる荒事芸だったという想像である。

付記

脱稿後に、ウイキペディアで「目が点になる」ような記事を見つけた。日本のはるか東、ちょうど東経一七〇度線に沿うようにして、カムチャツカ半島の北端から南の方へと海底火山群が連なり、北緯三二度、日本でいえば鹿児島・宮崎県

境の霧島山付近の緯度から、東の方へと折れ曲がり、その東の先端付近が海上に浮かび出てハワイ諸島になっている。この海底火山群を、学術用語で「ハワイ―天皇海山列」という！

どうして？
カムチャツカ北端から南へ縦に並ぶ海山群に、一九五四年、アメリカの海洋学者ディーツが、天智、神武、推古、仁徳、神功、応神、欽明、雄略、桓武、明治海山などと名付けていった。それで、南北縦方向の海山群が「天皇海山列 (Emperor Seamount Chain)」と呼ばれることになったという。

これも何かの心意伝承なのだろうか。そんなこととは無関係に、科学的必然性があるって天皇と結びつけたのだろうか。

海人族は錬金術師

海人族に関してもう少し物語る。

「倭人伝」の「裸国・黒鹵国」をエクアドル、ペルーに比定できたとして、なぜ当時の魏国人は、北米サンフランシスコあたりの地域は記録しなかったのであろうか。

現代でも日本側からの航路は黒潮、北太平洋海流に乗

情があったかもしれない。

中国は、鉄鉱石なら今も世界有数の生産量・埋蔵量を誇るものの、実情はどうか。

北京五輪特需で、中国での金属価格が高騰し、日本やオーストラリアで電線、ガードレール、マンホールのふた、半鐘、その他の銅製品や鉄製品が、転売目的で大量に盗まれる事件が、二〇〇七年中の報道に多かったことを思い出されたい。要するに、あれだけ広大な国土を持つていても、鉱物資源は国内で賄えるほど潤沢ではなかったのだろう。

ハイテクノロジの今日ですらそうならば、『三国志』時代の事情は推して知るべしである。

もしも魏が南米に進出し、交通するならば、日本列島の海人族を水先案内人として利用しない手はない。ということ、ある時期においては、倭国の海人族も巻き込まれた形で、南米での鉱山経営、などということが、あつたかもしれない。我ながら吹き出してしまいそうな話だ。

だがしかし、海人族と金属精錬との濃厚な関係を思わせる記事自体は、史書としての信憑性が認められている『続日本紀』に、明確に残されている。

ひとまず順を追って、『日本書紀』の記事から見えてゆ

ってシアトルやロサンゼルスへ向かうのが一般的である。コンパスなしの時代ならなおのこと、この海流を利用しない手はない。予定の航路から外れた場合でも、北極星の高さで自分の緯度はおおよそ測れるし、何よりそうして東へ向かってさえいれば、いつかはアメリカ大陸の壁にぶつかれる。「はからずも漂着した」という人々も含めて、北米に住民がいなかったわけではなからう。それでも、魏にとって北米は、南米へと南下するための指標とはなっても、寄港し取引するほどの価値はなかったということか。

北米になく、南米に豊富にあるもの。

とりあえず地図で見る限りでは、コロンビア、エクアドル、ペルー、チリと、アンデス山脈全体におびただしく銅、銀、鉄、金の鉱床が分布している。北米であつても、サンフランシスコから内陸の山地へ入れば金・銀鉱床が散在するが、認識されていなかったわけか。もしくはは当時は、金より銅の需要が大きかったということかもしれない。

当然採鉱技術とか、鉱床発見の技術とかの問題もあつて、いちがいに当時から盛んに鉱山開発が行なわれていたかのように話を進めるのは危険だが、中国大陸の権力者たちにとっては、なるべく多くの鉱床を確保したい事

こう。

天武天皇の死後、殯庭にて有力氏族たちが次々と誅、すなわち主題を分担して弔辞を述べてゆくのだが、その第一に、天武の壬生（生い立ち、幼時）のことを述べたのが、「大海宿禰荒蒲」という人物である。大海人皇子の生い立ちを知っているわけで、その乳母に近い存在であつたらう。

この「荒蒲」本人と思われる人物が、『続日本紀』文武天皇の大寶元年（七〇二）三月条に、冶金のプロフェッショナルとして現れる。

「戊子、追大肆凡海宿禰鹿鎌を陸奥に遣して金を治たしむ」（岩波新日本古典文学大系）とあるのがそれだ。

実際に陸奥から黄金の献上があるのは、この記事から四八年後の天平勝宝元年（七四九）のことだから、「鹿鎌」一代で成功したわけではなさそうだが、ともあれ日本国内では、錬金術ならまず海人族で、という認識が、人々の間にあつたのだろう。

海を通じて様々な地域の物産やそれにかかわるための知識、技術、情報を、海人族は獲得しやすかつた。こうしたことも、少し考えてみればやはり当たり前すぎるほどに当たり前のことなのである。「いつ」「どこ」が起源かの特定はできないが。

神道史学の真弓常忠もすでに、磯部が古代製鉄民でもあるという指摘を行なっている（『古代の鉄と神々』一九八五年 学生社）。それによると、磯部氏出身の伊勢神宮外宮神主家、度会行忠の著す『倭姫命世記』に記録された、「天照大神」巡幸コース上の途中鎮座地は、ほぼすべてが産鉄地だという。

前回の「空海の密教山相ライン」を想起させる話である。

そもそも志摩の磯部の地にも、褐鉄鉞の団塊である「スズ」があり、そうした鉱物資源が得られやすい土壌であることを認識して、彼らは生活拠点にしていたと考えられる。そこから、砂鉄精錬以前の、褐鉄鉞を利用した原始的な製鉄文化を持っていたはずだ、と真弓は推測している（前掲書）。

製鉄技術民という性格を持つから、大陸より新しい鉄精錬技術が入ってきてても、それを吸収できる。そして拠点を増やすうえでは漁労のみならず、農耕や製鉄を行なえる場という条件も伴わせていた。

磯部の生活基盤に農耕が重視されるのは、海人族が、そもそも各地域の農耕の起源をになっっているからである。彼らが種籾や技術を運搬するのだし。

「鶴の穂落とし伝承」と言われるものがある。日本でつけてきた、と言えまいか。

そうして生きる感覚を磨くことが、個人的幸福でもあり、共同体の秩序保全にもつながる。そういうふうにかつての人々は知っていたのではあるまいか。

ここまでなるべくさまざまな資料に触れてみてその紹介をしつつ、個人的な妄想もずいぶん書き連ねてきた。これが学術論文ではないことを悪用して、思考実験を試みたかったのだ。

今回の冒頭でもふれたとおり、純粋な夢想は必ずしも個人的なものではなく、共有されうるもので、しかもすでに伝承されていることもある。

私が個人的な妄想を述べているつもりでも、実は読者ご自身の以前からの実感であったり、歴史的に受け継がれているものがあるかもしれない。まだ出会っていないだけで、すでに資料はあるのかもしれない。

私の独創など、一行もないはずだ、と信じたい。

最後に本章の出发点であった、崇神紀六十年条小児の託宣について、一言触れておきたい。

白状すると、最初はたんに、この美しい歌（と言ってよいかは不問にして）の源流を知りたくて、調べ始めた。約二〇年たってもその欲求は満たされず、かわりに出会った資料たちに流されて、こんな所へ来てしまっ

は主に対馬や奄美大島などに伝わる。外では朝鮮半島や中国などに分布する。稲穂をくわえて「天翔け」てきた鶴が穂を落とし、そこで農耕が始まったという伝説である。それが『倭姫命世記』でも、伊雑宮鎮座の由来として語られている。

昔の船乗りは海上で迷ったら鳥を放して陸地の方向を知ると聞く。天翔ける霊鳥に導かれながら海翔ける人々の、信仰伝承といえよう。こうしたことも、磯部が南方系の海民DNAを持っている状況証拠となる。

神事のなかに生活の場を見つける

それぞれの地域共同体が宝として大事にしている物事には、それぞれの感覚に訴える「霊格」があった。そしてその霊格を感じるための感性増幅の趣向を、人々は意識的、無意識的に凝らしてきたのである。

典型的には祭祀祭礼であるが、異世界・異社会との交流や、場合によっては戦争すら、命がけのオマツリであったらう。

日常においても、実用性に「霊威」を認め、知識・技術を「霊能」として磨き、蓄積した。つまり、生活のあちこちに神事がある。いや、神事の中に、生活の場を見

た。が、今ここにいるから、以前と違った味わいを、覚えられようにもなった。

あらためて復唱してみたい。できれば音読をおすすめする。本章全体を通して読まれた方なら、心に何事か起さるのではないだろうか。

玉菱鎮石。出雲人の祭る、真種の甘美鏡。押し羽振る、甘美御神、底寶御寶主。
山河の水泳る御魂。静掛かる甘美御神、底寶御寶主。

「私」たちの原風景は、「私」たちの夢や希望の母胎である。

「私」たちの記憶の奥底に横たわるイメージ世界が生氣を放つ時に、生きる力も実感もわくことだろう。

生きて、みずみずしいむき出しの「私」の誕生を知るとき、

そのモノのために祈り、祭るとき、
「私」たちの、命の水底は煌く。